

□ 第一幕

○ 第一場

(ひどく大きく聞こえる時計の秒針の音。カチツ、カチツ、カチツ……  
舞台、その簡素な空間は劇場の楽屋で、3人の役者があまり動かず、ジツとしてい  
る。)

鏡に向かって化粧を直す者、ヘッドホンで何かを聞きながら瞑想をしている者、  
台本を広げて固まっている者。しばしの沈黙。……)

役者1 (ボソツと) ……うるさいわね。

役者2 (ヘッドホンをしているが何となく声に気づき) えっ？

役者1 ……うん、何でも、時計の音がね。

役者2 ……、(ヘッドホンを外し) えっ？ なんか言った？

役者1 別に。

役者3 分かった。

(役者3、壁にかかっていた時計を外すと、その時計を床に叩きつける。)

役者1 えー！ ちょっと何してるのよ。

役者3 いや、うるさいって。

役者1 壊せとは言っていないでしょ。

役者3 でも、これで静かになった。

役者1 いやいや、それでありがどうか言えないわよ。

役者3 ……(役者2をジツと見る。)

役者2 いや助けを求める視線むけられても。

役者1 あーあ、これで時間が分からなくなった。

役者3 俺の腹時計で。

役者1 それって正確なの？

役者3 ああ。

役者2 実は、それに関してはけっこう本当なんだ。僕も前に見てビックリしたこと  
がある。

役者1 ちなみに開演まで何分？

役者3 10分30秒。

(役者1、自分のカバンを取り出して、それを開けて、中からスマホを取り  
出して見る。)

役者1 18時19分、

役者1と3 (同時に) 50秒、51、52、…、ゼロ。

役者2 ちょうど10分前か。

役者1　すごい。  
役者3　てへへ。  
役者1　何照れてんのよ時計は自分で弁償しなさいよ？  
役者3　えっ！

(そこへ駆け込んでくる制作さん。)

制作　みんな。

役者1　分かってる、10分前でしょ。

制作　その10分前に、実は、悪いニュースがあるの。

役者1　何よ。

役者2　何ですか？

制作　今日の予約数は知ってるわね？

役者1　ええまあ。

役者3　確か3組。

役者2　組っていうかそれぞれ個人だから3人。

役者1　言っちゃ何だけど少ないわね。

役者2　人数は関係ない。たとえ一人でも心を込めて。

役者1　分かってるわよ。

制作　実は、言い難いんだけど次々と、3名の方から当日キャンセルしたいって電話が。

3人　えっ？

役者1　ってことは、今日のお客様。

制作　ええ。

役者3　イープラスでの売上は？

制作　ゼロ。

役者2　ああだからイープラスは意味ないって言ったんですよ、高い手数料払ってぜんぜん。

制作　今日だけよ今日だけ。

役者3　チケットぴあは？

制作　そもそもぴあではウチのチケット扱ってないから。

役者3　そうなの？

役者1　っていうか、コリッチからカルテットオンラインにしたのがいけないんじゃないの、よくサーバーダウンするし。

制作　予約サイトに責任転嫁はよくないわ、原因は他にある、よくサーバーダウンはするけど。

役者3　ってことは、今客席は？

制作　ガランガラン。

役者3　ガランガラン。(ポーズ)

制作　ガランガランポーズやめて。

役者3　はい。

役者1　あー、まさか夢にまで見たこんな日が来るなんてね。

役者 3 夢にまで見た。

役者 2 なんかもそれってポジティブな言い方に聞こえるけど。

役者 1 違うのよ、今まで、けっこう夢に見たことがあるのよ。(急にラジカセでいい感じの音楽を流す)：公演中、舞台の上ですごく達成感のある芝居をする、いえ逆に、台詞が出てこなくて冷や汗をかく時もあった、けれど一貫してるのは、：舞台の上から客席を見ると、誰もいないの。ノーオーディエンス。誰もいない劇場で、私達は闇に向かって上演しているって悪夢。(ラジカセを止める)

役者 2 嫌な夢だな。

役者 3 確かに。

役者 1 でもとうとう正夢になりそうよ。

役者 3 人 (偶然に同時に同じ方を向いて) 闇。

役者 3 いやいや、まだ開演まで、58、59、7分あります。

役者 1 きつと誰も来ないわ。

制作 当日券で来られる方がいるかも知れません。

役者 2 いや、それはないだろう。なるべく前売を売りたいって作戦から、当日料金を

前売の3倍にしたじゃないか。

みんな あー！

役者 2 確かに可能性はゼロじゃない、が、

役者 1 限りなくゼロに近いつてわけ。

役者 3 限りなくゼロに近い透明なブルーみたいな映画ありませんでしたっけ。

役者 1 と 2 知らん！

制作 きつと、ワールドカップの所為ね。

役者 1 ああ、ワールドカップ。

役者 2 ワールドカップかあ。

制作 まさか日本があそこまで勝ち進むなんて、

役者 2 誰もでしたね。

役者 3 なんですかワールドカップって？

3人 ……(一瞬止まるが)

制作 いいえ、吉成君の反応は正しいわ。昔は演劇人はワールドカップなんて誰も知らなかった。

役者 1 そうなの？

役者 3 ワールドって言うくらいですから余程大きなカップなんでしょうねえ。

制作 そう、演劇人はみんなこんな感じだった。演劇に興味がある人はワールドカップになんか興味がなかったし、逆にワールドカップに盛り上がる人は演劇なんて見なかったの。この2つは別の次元の、別の世界の話で、完全に棲み分けがなされていた。

役者 1 それが今やワールドカップが演劇を侵食し始めたのね。

役者 2 侵食かあ。

役者 3 なんかないかもしれませんが、悪い奴っすね、そのでかいカップは。

役者 2 僕たちは稽古稽古でテレビも見れなかったから完全に出遅れてるけど、世の中はワールドカップ一色、渋谷の交差点なんか毎晩凄いいことになってるって。

制作 ま、ちよつとテレビ見たいしね、正直言うよ。

役者 1 私も。

役者 2 正直になりすぎ。負けたらダメですよ。

役者 1 と制作 はい。(顔を見合わせて苦笑)

役者 3 あのう、ちよつといいですか？

役者 1 あつ、吉成君はイイのよ、そのまんま、そのまんまの姿でいて。

役者 3 ガランガラン。(ポーズ)

制作 でもそのポーズはやめて。

役者 3 はい。いや、あのですね、そっちの話題じゃなくって、あのう、一つ疑問なんです、その場合、いや、そのつていうのは、あの、お客様が誰もいらっしやらなかった場合ですが、えーと、それでも上演するんでしょうか？

3人 ……(一瞬止まるが)

役者 1 ……あ、当たり前でしょ、夢ではやってたわよ、あれを正夢にするためにはやらないと。

役者 2 正夢にするためにやるわけじゃないけど、まあ、やるでしょ、そりゃ。

役者 3 そうですか、でもそれって、変な話ですが、やったことになるんですか？

役者 1 えっ？ どういうこと？

役者 3 誰も観てないってことは、なんていうか、誰もそれを証明できないっていうか。

役者 1 いやいやいや、私達がいるじゃない。

役者 2 あっそっか、量子力学、量子力学かあ。

役者 1 えっ、漁師？ 何の話？

役者 2 そっちの漁師じゃなくて。

役者 1 どっちの漁師よ。

役者 2 頭から銚子や三崎は追い出して、相対性理論と並ぶ物理学の基礎の一つです。

役者 1 いや何言ってるのか分からないけど、私の漁師が魚の漁師だってよく分かったわね。

役者 2 ズバリ顔を見れば。

役者 1 魚顔？

役者 3 違うと思います。

役者 2 量子力学って言うのはですね、簡単に言うと、例えば森の中、誰も見ていない奥の奥のずつと奥の方で、木が一本倒れたとするでしょ、しかしそれは、本当には倒れたとは言えないって話です。

役者 1 えっ？ ぜんぜん分かりやすくなってないんですけど。それが漁師力学？

役者 2 そつちの漁師じゃなくって、例えば、このペットボトル、ここに南アルプスの天然水を置きます。そして、それに背中を向ける。今はここに4人も居ちやいます。が、仮に部屋には1人だと仮定しましょう。さあ、背中を向けた自分の背後には、本当に南アルプスの天然水がありますか？

役者 3 あります。

役者 1 そりやあるでしょ。

役者 2 いいえ、量子力学的には、そこに南アルプスの天然水があるかないかは、分からないんです。はっきりとは、あるとは言えない。

役者 1 いや意味が、だってここに南アルプスの天然水があるでしょ？ 確かにあるでしょ、で、背中を向けます、でも、ほら、振り返ったら確かにある。

役者 2 (背中を向けて見てない) いや分からない。

役者 1 その振り返る前の、見えていない短い時間の問題です。

役者 2 えー、まさかその間だけ南アルプスの天然水が消えてなくなつてるとでも言うの？

役者 2 可能性としてはイエス。

役者 1 えー、そりやないでしょ、だってあったでしょ、みんな見てたでしょ？

役者 3 見てました。ありました。

役者 2 そりや見てる人が居るからです、僕が問題にしているのは見ている人が誰もいない間の問題、つまりね、量子力学では、観察者が居ることがその存在の絶対条件なんです。

役者 1 やっぱちよつと腑に落ちないっていうか。

役者 3 あっ！ つまりこれを俺たちの公演に当てはめると、実際に上演しても、お客さんが誰もいない場合には、上演したことにはならないと。

役者 2 可能性としてはイエス。

役者 1 えー、でも実際にやるんだし。

制作 ああ、ビデオでも回しましょうか？ 記録として残しておく。

役者 1 うわっ、動員ゼロ記念？ ちよつとシャレなんなんない。私の爆笑ギャグが炸裂してるのに客席がシーンって。

役者 3 しかしそれなら、上演した記録は残ると。

制作 ビデオ、準備するわね。(インカムを付けて) あ、誰か、このインカム聞いている？

役者 2 さて、それを後から見てみたら、誰もいない舞台がただ録画されてたり。

制作 えっ？

役者 1 えっ、ホラー？ これってそつち方面の話？

役者 3 うわーやめて下さい、こ、こう見えて苦手なんです、怖いのは。

役者 2 違う違う、で、どうしますか実際、もう間もなく開演時間になります。本当にやりますか？ 例え量子力学的には上演したことにならなくとも。

制作　ちよつと受付見てくるわね？　一人でもお客さんが来てるかも。ビデオも回すから。(去る)

(しばしの沈黙。)

役者1　・・・鳴海君、何かあるの？

役者2　何かって？

役者1　分かんないけど何となく。

役者2　うん、いや、あのね、実はって話なんですけど、ちよつと変な話ししていいですか？

役者3　えっ、これ以上っすか？

役者2　いやいや、別に変な話なんて一個も。実はね、昨日の夜、ちよつと実家から電話があってね。

役者1　えっ、実家って埼玉の？

役者3　鳴海君、埼玉なんですか？

役者2　そう、別に遠くない遠くない、急行乗れば1時間ちよつと、でき、実はね、親父が倒れたらしいんだよね。

役者3　えっ、えっ、大丈夫なんですか？

役者2　いや、ちよつと分かんなくて、すぐにどうこうって話じゃないと思うけど入院してるみたいで。

役者1　あの、自転車屋のお父さん？

役者2　うん。

役者3　草間さん鳴海君の実家詳しいっすね。

役者1　いや、一回見に行ったことがあるし。遠くからだっただけど。

役者3　……

役者2　まあ確かにさ、医者とか役者とか、者(しゃ)が付く仕事は親の死に目にも会えねえから絶対そんな仕事には付くなって言われててね、つまり勘当同然で役者の道に入ったからさ、まあ行けなくても仕方がないって思ってたんだけど、こうなるとき、今から行けば色々間に合うなって思っっちゃって。

役者3　今から行けば……

役者2　そう、「今から」行けば。

役者1　実は、私も、そういうことなら、ちよつとあって。

役者3　えっ？　草間さんも何かあるんですか？

役者1　ええ、実は、一緒に暮らしている猫がね、ほら昨日の夜地震あったでしょ、すぐ収まったけどあれでビックリしたらしくって、窓の隙間から逃げ出しちゃって、まだ見つかってないのね。

役者 2 あつ、それで今日、ギリギリに劇場入りするってラインに。

役者 1 うん、ギリまで探してただけど、ぜんぜんで。あほら、猫とか、動物のことって飼ってない人には分からないっていうか、きっと理解得られないでしょ、だから黙ってたんだけど本当は、心配で。

役者 3 すぐにでも探しに戻りたいと。

役者 1 うん。

役者 3 実は俺も。

役者 2 えっ、吉成君も？

役者 3 明日の朝池袋のアニメイトで限定グッズの発売があつて徹夜で並ぶつもりなんです、かなりの人気商品で、一分一秒でも早く並びたいという気持ちだ。

役者 1 と 2 アニメ？

役者 3 ゲームです。

役者 1 と 2 ファイギュア？

役者 3 超合金です。

役者 1 超、今どき超合金ってあるの？

役者 2 いや僕は知らないし。

役者 3 マニアックな世界の話なんで、ゲームやってない人には分からないっていうか、きつと理解得られないから、だから黙ってたんだけど本当は、ヤキモキしてて。

役者 1 つてことはさ、一応聞くけど、これって、

役者 2 うん、いいんじゃない、かな、

役者 3 じゃ、決まりってことでいいっすね。

制作 (出てきて) ちょよ、ちょっと待ってよ、勝手に話進めないでよ制作抜きで。ビデオオセッティングしちゃったのよ、お客様がいなくてもやらないと。

役者 2 ビデオのために？

制作 そうじゃないけど、だって何か約束が果たされてないような気が。

役者 1 約束って？

制作 分かんないけど、だって上演しているはずの時間に、劇場が空(カラ)なんて。

役者 3 じゃ、アイツを使えば良いんじゃないですか？

制作 あいつ？

役者 2 あそっか、こういう時にためにアレを準備してるんだし。

制作 えっ、アレとかアイツとか、違うわよ、急な怪我とか、本当にどうしようもない時の保険よ、アレは。

役者 1 私は賛成、万が一って意味では今回のこれがそうだと思うわ。ましてやお客さんが観てないって言うんだし。

役者 2 プログラムは？

役者 1 もちろん完璧よ。

役者 3 俺の滑舌まで完璧に入れてある。  
 役者 2 そこは完璧じゃなくってもいいんだけど。  
 役者 3 いや、アンドロイドが人間を超えちゃ仕事がなくなるから。

(遠くの舞台から開演前の音楽が聞こえ始める。)

制作 ……アンド、ロイド。

役者 1 そう、アンドロイドよ。

制作 普段はあんなに、アンドロイド演劇に反対していたあなた達が。

役者 2 しかしそれを説得してアイツを準備させたのは劇団側の意向だし。

役者 1 ま、都合がいいって思うけど、今回はそれでお願いって思う。

制作 誰も、お客様がいない劇場で、舞台の上ではお人形さんたちが誰のためでもない演劇を上演するって、どんな冗談よ。

役者 3 なんかシユールつすね。

制作 シユールじゃない。

役者 2 でもすみません、もう僕たち行くんで。(衣装を脱いだり、準備を始めてる)

役者 1 ごめんね、今度ランチ奢るから、許して。(準備を始めてる)

役者 3 男には、やらねばならぬ時があるんです。(準備を始めてる。衣装よりも派手)

制作 意味分かんないし。っていうか、その格好で帰るの？

役者 3 徹夜の準備です。

役者 2 でも本当、すみません。

役者 1 ビデオあとで見してね。

役者 3 御免。

(3人それぞれ、自分の傘を持って退場。)

制作 ……ったく。(意を決して、インカムに) 全スタッフにお伝えします。3 A 3、3 A 3。今回の上演は予定を変更してアンドロイド演劇になります。予定を変更して、アンドロイド演劇になります。3 A 3。そ、役者全員よ。技術スタッフはスタンプバイお願いします。30秒で起動して。出来るわね。音響照明はすべてプログラム通りでアドリブが入らないことを頭に入れておいて下さい。ミスが起こっても舞台上にはフォロー出来る人間が一人もいません。人間はいません。よろしくね。それと、客席には誰もいませんが、記録用にビデオカメラが回ります。それではみなさん、よろしくお願いします。

間もなく、開演いたします。舞監さん、準備が整い次第キューを出して下さい。遅れ客の心配とかなないから、いつでもそちらのタイミングで。各スタッフ、気持ちを引き締めて。ある意味この本番は戦場よ。よろしく。3 A 3、3 A 3。(…去りかけるが一瞬立ち止まり、振り返る)…戦場。(そしてその後に去る。)



(遠くから聞こえてくる戦場のノイズ。舞台を狙うようにビデオカメラがセットされる。そのカメラ映像は、舞台奥の白壁をスクリーンに映像として流れる。字幕。\*あるいは、字幕以外の表現にて。)

「だから、これは、ここから先は、i f、の話。

誰かによって書かれ、時に誰かによって書き直された、

『硝子細工のイヴ』、というもう一つのお話。

一冊の本。

いくつもの祈り。

i f、もしも、そんな未来が訪れたら、

i f、もしもの、そんな過去だったら・・・」

(続いて、そのスクリーンには「3 A 3」の文字が。その「3 A 3」の文字が180度回転すると、それが「EVE」の文字に見える。そして、「of the glaswork toy」の文字が補われ、その後には、日本語タイトルの「硝子細工のイヴ」の文字に入れ替わる。)

『ウテン結構第2回公演 硝子細工のイヴ』 開演。」

(「開演」の文字が消え、暗転。)